夕焼け通信1259号　2020.5.11

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）５

木幡智恵美

インフルエンザ（5）

義母の入院が延びることになった。下血があったのだ。肺炎の方はすっかり良くなり、食欲も出だし、主治医が入院の目安としていた二週間目、退院する予定の朝のことだ。

連絡を受けて病室に行くと、看護師さんから、大腸の検査をするため、主治医が消化器内科の先生に代わること、病室はこのままであることを告げられた。大腸の内視鏡検査は午後行われた。呼吸器内科の主治医は中堅のがっちりした体格の先生だったが、消化器内科の主治医は小柄の、退職が近いのではと思われる、穏やかな話しぶりの先生だった。

「大腸に、憩室というものができていて、そこからの出血ですね」

検査結果について先生がおおまかな図を描きながら説明をすると、

「去年、私、それでここに入院しました」

と、夫。

「親子ですねえ」

先生が微笑みながら言われた。

夫の時と同様、三日間絶食をし、その間に再度の下血がなければ、重湯から始まる食事となる。下血は退院予定の朝の一回だけで、その後はなく、順調に回復し、予定より一週間延びて三週間で退院となった。退院したその午後にケアマネさんが来られ、今後の相談をする。デイサービスには本人が「行く」と言うので、翌日から行く手筈が整った。

退院してきた夜は、寛大や実歩も一緒に食事をしたせいか、義母もつられてよく食べた。

混乱はその夜から始まった。年寄りは入院生活が長くなるほど混乱が長く続くようで、連休までの約二か月は、翻弄された。体感温度が狂い、排泄感覚が狂い、時間が狂い、入院以前より介護が必要な状態が続いたのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

連休と読書

読書好きの職員から声をかけられた。

「この連休、さあ読むぞと思っていたのに読めないんです。」

ぼくは借りる派だが、彼女は買う派で、話題の新刊本を購入しては、読後の感想とともに回してくれる。大変ありがたい存在である。

外出を制限された連休など前代未聞で、本好きには願ってもない環境になったわけだが、ここまで贅沢な希望が叶ってしまうと芥川龍之介『芋粥』五位の某のごとく読書欲も減却してしまうものらしい。

「いやあ、ぼくも同じ。いつもの休みだったら読むんだろうけど、すっかりリズムが狂ってしまって。」

図書館から借りてきた本も、結局最初の数ページを読んだくらいで放ってしまっている。返すつもりが休館になってしまい、いつ再開されるかも分からない。貸出期間の大幅延長が災いして、きっとおもしろい小説だろうとは思うものの、ちっとも読む気が湧いてこない。

ただ、忙しいいつもの日々ならば、どうしても読みやすい向こうから引っ張り込んでくれるような小説に手が伸びがちなのだが、この状況下でしか読まないだろうという本もあるような気がした。長編故に断念した必読古典とか歯が立ちそうもない難解な書とか。

そんなことをつらつら考えていると楽しくなってきて、近所の書店に自転車を向けた。二メートルおきの停止線を順に進み、ビニールシートの先のレジに久しぶりに手にした岩波文庫を差し出す。おう、けっこうわくわくしてくるじゃないか。

決して読みやすい本ではなかったけれど、背伸びして読んでいた若い頃の感覚もちょっぴりよみがえってくるような気もして、程なく読了した。スンニ派とシーア派がどう違うのか初めて知った。歩み寄るなんて不可能にしか思えない二つの違い、右翼と左翼、保守と革新、自粛警察とパチンカー、筆者の示すイスラームの諸相が今と無縁だとは思えず、とてもおもしろかった。

翌日、再び自転車で書店に向かった。やはり停止線に並んで、ビニールシートごしにアルバイト店員に同じ筆者の岩波文庫を渡す。コロナ騒動がなければ、読むことはなかっただろうとしか思えない重厚な一冊。

家に戻ってページをめくる。おお、なんと難解な。途中何度かただ字を目で追ってるだけでちっとも内容が入ってこないことに気づいたが、行きつ戻りつしながらちょっぴり分かってきたり、やっぱり分からなかったりを繰り返して読了する。

コロナ禍に思想の棚へ導かれ　　おそまつ

30代フリーター　やあ、ジイさん。「医療は、これまで誰も持ち得なかった『国民の人権さえも制限できる巨大な力』を持ってしまった」と、森田洋之という医師が書いていた（「人は家畜になっても生き残る道を選ぶのか？」、4月14日南日本ヘルスリサーチラボ）。

年金生活者　新型コロナウイルスの感染防止を理由に世界中の人びとから移動の自由を奪っているのは直接には国家だが、国家にそれができるのは医療の名による正当化があるからだ。そして医療は患者をひとりも死なせてはいけないという「ゼロリスク神話」を行動原理にしておのれを正当化している。

その結果、他のどんな人為的な力をもってしても不可能と思われる大規模な経済の停滞を現出させている。それは企業倒産の頻発、失業者の急増、それにともなう自殺者の増加といった、コロナによる死者を上回るかもしれない悲劇の可能性をはらんでいる。医療はそうした犠牲を出してでもおのれの行動原理を貫く力を持っていることがあらわになった。それに従わざるを得ない現在の国家はある面で医療という権力によって動かされていると言える。

30代　それもジイさんのよく言う国家からの権力の分散かい。

年金　国家から個人、企業、国家間システムへの権力の分散は、資本主義の高度化にともなう現在の世界史的な流れだ。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化が企業への、資本のグローバル化が国家間システムへの権力の分散を駆動してきた。医療はソフト化された産業の一分野を形成している。

産業のソフト化が国家から企業への権力の分散を駆動したのは、ハードな産業すなわち第2次産業なら必須とする国家によるインフラ整備をそれほど必要とせず、そのぶん国家への依存を免れているからだ。

現在の医療を牽引しているのは製薬会社や医療設備・機器メーカーだ。それらはモノを製造する点では第2次産業だが、研究開発に莫大な投資をしている点ではれっきとした第3次産業、ソフト化された産業ということができる。研究開発を中心としたその力は世界の医療の方向、したがって国家の医療行政を左右する。

30代　それだけでは医療の力が突出しているのを説明できないだろう。

年金　医療は消費の面から見ても、国家から分散した権力を手にしているとみなすことができる。先進諸国での消費の過剰化、すなわち選択的消費が必需的消費を上回ったことにより、かつてなら王侯貴族だけが求めた「不老不死」を一般の個人が求めるようになった。それが患者をひとりも死なせてはならないという「ゼロリスク神話」を生み、医療がその鍵を握る存在として権力を持つようになった。消費の過剰化によって国家から個人への権力の分散が進み、個人が手にした権力の一部が医療に集中した過程をそこに見ることができる。

30代　緊急事態宣言の1カ月の延長で個人消費の冷え込みによる新たな失業者は77万にのぼるという民間エコノミストの予測が報じられていた（5月2日時事ドットコムニュース）。

年金　「不要不急」の消費の抑制が、大勢の「必要緊急」な糧道を断ってしまう事態が進行しつつある。

政府が国民に要請している不要不急の外出の自粛は、言葉をかえて言えば選択的消費の抑制を意味する。前世紀の末、吉本隆明は国民が一斉に選択的消費を抑えれば、自らの生活水準を落とすことなく、時の政権を倒すことができると語った。いま現実に起きているのは多くの国民の生活水準が低下の危機に直面する一方で、政権は続いているという正反対に近い事態だ。

どちらにせよ言えることは、現在の先進国や新興国の経済がいかに「不要不急」の消費に、言い換えれば選択的消費の支えられているかを新型コロナがあぶり出したということだ。

30代　「医療崩壊」を防ぐことが至上命令のように語られている。

年金　スローガン風に言えば「医療を守れ」となる。危機に際して叫ばれる「国家を守れ」という号令が国民よりも国家を優先したように、「医療を守れ」のかけ声は人間よりも医療のシステムを優先することにつながる可能性をはらんでいる。

医療現場で踏ん張っている医師や看護師を前線の兵士にたとえ、その足を引っ張るようなことを言うな、といった主旨の発言がネット上を行き交い、医療を批判するのは許されないことのような空気をつくり出す。

医療が崩壊したらたくさんの人が死ぬ。医療が発するこのメッセージに人びとは脅える。その前提にあるのは、医療は人を死なせないという信仰だ。

現実はそうではない。病院は人の死が日常化した場所だ。そこで救われたと思われている命の中には死を先延ばしにされている命も少なくないはずだ。人間の死亡率は100％という動かせない数字は病院でこそリアリティーを帯びて迫ってくる。

医療崩壊はしないほうがいい。だが、崩壊を恐れるあまり、個人の生活様式の変更まで迫って自粛を求め続けるのは、人権を侵害する恐れがあるだけなく、「経済崩壊」を引き起こし、助かる命も助からない事態を招く危険があることは知っておかなければならない。

ニュース日記　737

中村　礼治

権力としての医療